

講録のことば)の化他行者であるとして別嘆されたが、そこに浄土門の伝統と系譜が明示されたと言える。当代浄影・天台・嘉祥等聖道諸師が各観経疏を成せるに対抗し、道綽がよく竜樹・世親以来の念仏の大道統を保全し推進し得た功績は、親鸞が「道綽決聖道難証、唯明浄土可通入」と歌い、「誓師のおしへをうけたへ、綽和尚はもろとも、在此起心立行は、此是自力とさだめたり」と讃えたに最も明らかである。中でも第十大門では、一方で大経を引き他方で回向義を説いたが、のち親鸞が「教」とは大経であるとし、また真実浄土一宗の基本が往還の二回向にあると示した思想源の一半が安樂集にあったことを知らしめられるのである。道綽が曇鸞に承けたこの回向義はさらに世親の願生偈にまで溯り得るものであり、願生偈の五念門(礼拝・讚嘆・作願・觀察・回向)には、ながきに亘る浄土行業の実修が封じられたものであろう。近く維摩経の仏国品第一の経説には、宝積長者の見仏に伴う五念門行の展開がさながら見られる。もとあったとされる世親の維摩経論は今見るべくもないが、恐らく古くインドには仏国品ごとき内容の経が独立別行していたものでもあろう。しかしまた、五念の前四が往相として不住世間の不退智慧道たり、後一が還相として不住涅槃の回向方便慈悲道たるどころ、維摩経菩薩行品第十一における不尽有為・不住無為の中道義に相応するもので、それは仏国品に次いで方便の一品あり、そこに維摩居士の初登場を見たことと共に、また維摩一経のおのずからなる形成たるをうなずかされる。それにしても回向義は既に「回向心是菩薩浄土、菩薩成仏時、得一切具足功德国土」(仏国品)と明示され、また回向

(pari-nāma)の原義たる「転変」を含めての四秘密(四依cat-vitvobhisaṃdhaṃ)の説が「依於義、不依語。依於智、不依識。依了義経、不依不了義経。依於法、不依人」(法供養品第十三)として見られることも維摩経の本来深く藏した浄土教教理の基底面の露呈である。転識得智が全仏教の根本趣意とすれば、回向一門こそ仏陀正覚の直証であろう。即ちまた九方便の最後が回向方便たるゆえんでもある。安樂集は三十八番の料簡を用いて、一方三論の有相見の見方、他方撰論の別時意の見方からそれぞれ浄土教を弁証してそれが本願力回向による時機相應の如実大道なるを真に論定したもの、方法論的にはすべて客観主義的であるが、そこにかえて「資性温厚」(金沢大学院鳥文庫所蔵写本五冊本逸名安居講録「安樂集聞書」参照)とされた集主の宗教味ゆたかな風格をしのぶことができるようである。

### 『教行信証』教巻標挙の文の

在り方とそれについての思索

日 野 環

聖人の『教行信証』の「教巻」の「標挙之文」の在り方は――

「顕浄土真実教文類一

愚禿釈親鸞

大無量寿経真実之教

浄土真宗

謹按浄土真宗有二種廻向一者往相二者還相就往相廻向有真実

## 教行信証……」

とあるのが定本化したる御本書の在り方の如く常識化しておる。これは存覚の「六要鈔所積本」標挙之文の在り方が左様になつておる。『阪東本』ではこのところが欠失しておるがおそらくそこでは『西本願寺本』と同様な様態であつたと思われ。古写本として現存するものうち由緒、伝来の尤も正しくして權威のある、かつ年代の古い『高田本』と『西本願寺本』のこの標挙之文の書写されておる位置とその様態は、「六要所積本」のそれとは異なるのである。

『高田本』と『西本願寺本』とは一致するし『阪東本』もおそらく上の二本と同様であつたと推考されるから現存の尤も古い權威ある三本の在り方にかえてして親鸞の信体験の自覚体系を追求し思索すると『教行信証』の三序のダイナミックな円融相即の面影が出てくる。ここから親鸞が本書に於てしばしば現表しておる聖人の時間感覚が出て来るのでないかと思う。今試みに一つのアイデアを提案する。

## 如来等同について

松原 祐 善

親鸞聖人の晩年の『正像末和讃』や『一念多念文意』やその他多くの御消息には、現生正定聚ということが目立って強調されている。すなわち真実信心のひとは現生に正定聚に住し、補

処の弥勒と同じく無上大涅槃を証する身と定まるのである。本願を信ずる行人は撰取不捨のゆえに等正覚にいたり、弥勒菩薩と等しいのである、この便同弥勒の思想から諸仏等同の思想へと展開され、更らに如来と等しいという表明が、八十五・六歳の聖人における信心のよるこびの最高潮とも思われるので、今回聖人の御消息を中心にその信境展開のあとをたずねてみたいと思つたのである。無論この方面の研究も既に先輩によつて試みられているので、私として新しく加える何もものもないが、今日報恩講を迎えて祖徳讃仰の一端にもなれかしと思つておる。

まず聖人の御消息中に弥勒等同のことがはじめてみられるのは、東本願寺所蔵の「かさまの念仏者のうたがひとはれたる事」と外題する真蹟書簡である。これは消息というよりも法語という方がふさわしいようであるが、『教行信証』信卷末の真仏弟子釈と対応してよくその要をつくせることが思われる。この日付が建長七年丁卯十月三日愚禿親鸞八十三歳書之とあるが、この建長七年頃といえは善鸞をめぐりて関東教団には大きな動揺波瀾が見られる時である。すなわち建長七年の三月三日日付と推定される常陸門弟に与えられし消息。同年九月二日日付の迫害をうける念仏者に宛てられし消息。そして今の法語が十月三日であるが、十一月九日日付の善鸞に宛てられし消息。翌建長八年正月九日日付の真浄坊への消息。而してこの年の五月二十九日に慈信坊善鸞に対して義絶状を発せられているが、やがてはかかる教団崩壊の危機のなかに聖人の信仰はいよいよ透徹し、高揚されていったものと思われる。